第四回　平成二十六（二〇一四）年　七月十九日

夙川文化探訪　―ミュージアムとの出逢い２―

塩田　昌弘（しおた・まさひろ）

前回の講座では、夙川からイメージする桜と水、そして夙川公園のモニュメントの馬をキーワードに、夙川文化探訪ということでお話をすすめました。

日本では春になると、多くの桜好きの人々が毎年、桜が開花すると花見をし、楽しく旧交を温めます。しかし、知人との別れに見る桜は、美しくも悲しいものです。そういう心情で桜を見る場合もあります。

そこで、桜に関する歌をいくつか紹介いたしました。それらの歌は、川端康成がノーベル文学賞を受賞した際に記念として出版した『美しい日本の私　その序説』（講談社現代新書、一九六九年）に収められているもので、高僧、武将あるいは公家の醍醐味の歌が網羅されている中から選んだものです。

また、司馬遼太郎の国民的文学作品『竜馬がゆく』に描かれた夙川のシーンも取り上げました。夙川が出てくると非常にうれしく感じる私は

（写真１）
夙川の清流

通勤の途中、朝とか夜遅くに、ここがその歴史の舞台になったんだなと思いながら、夙川橋あたりを行き来しているんです。

司馬遼太郎は他にも、『花神』で大村益次郎、長州藩で陸軍を作った村田蔵六を描いてます。ずっと西のほうから日本列島に花がひらき、そして伝播して北上していくという、そのように明治維新が行われていったというのを象徴した、花の神、『花神』という歴史小説ですね。この村田蔵六は藩の命令で、オランダ語を勉強する為に当時の中之島の近くにありました適塾の緒方洪庵のところで学んでおります。同じ頃福沢諭吉も学んでいます。両方ともよく学び塾頭になっております。

また、明治の青春時代をリアルに描いた小説『坂の上の雲』もベストセラーになりました。

「この物語の主人公は、あるいはこの時代の小さな日本ということになるかもしれないが、ともかくもわれわれは三人の人物のあとを追わねばならない」（『坂の上の雲』（一）文春文庫、二〇〇九年、七頁）。秋山好古（よしふる）と秋山真之（さねゆき）、正岡子規、この三人の物語を司馬先生は明治時代の若者の代表にしている。弱い小さな国ですけれども、だんだんと世界にのしていくという坂を上り始める。そういう物語です。

この写真（写真2）は道後温泉、夏目漱石の小説『坊ちゃん』に出てくる有名な温泉ですね。道後温泉のシンボルマークを、私は長い間「宝珠」と思っておりましたが、お湯を沸かした時に湧き上がる泡、または

（写真2）
道後温泉

玉のように湧き出る熱湯を表しているようですね。それを縁起物として表現したのでしょう。この湯玉を詠んだ歌もあります。また、もうひとつのシンボルの白鷺ですが、これは、山の中で白鷺が湯に入って傷を治しているのを村人が見つけて温泉を発見したという伝説がもとになっています。京風の簾（すだれ）は、夏の風物詩となっています。

次の写真は、松山市一番町に建つ「坂の上の雲ミュージアム」です（写真3）。これは安藤忠雄の作品ですけれども、この大手前アートセンターも安藤忠雄の作品です。そして、この司馬遼太郎記念館（大阪府東大阪市下小阪）も安藤忠雄ですね（写真4）。

おもしろいのは「坂の上の雲ミュージアム」の所蔵作品と展示内容です。『産経新聞』に連載されたその小説で描こうとした歴史を、展示物によってわかりやすく説明し、見学できるようになっています。秋山兄弟の写真もあります。秋山好古、兄さんですね。外人のような顔をしています。秋山好古は陸軍士官学校に入って騎兵隊を作り、陸軍大将になって引退しました。弟の秋山真之ですが、ＮＨＫドラマでは、モックン（本木雅弘）が秋山真之の役をしていました。東京大学の予備門に入学して海軍兵学校で研修するんですね。米国に留学して第一艦隊参謀にな

（写真３）
坂の上の雲ミュージアム

（写真４）
司馬遼太郎記念館

ります。有名なバルチック艦隊と戦いますね。その時の丁字戦法という伊予の水軍、自分らの田舎の水軍が使っていた戦法で勝つんですね。そして海軍中将にまで上り詰めます。香川照之は正岡子規の役を演じ、妹の律を演じたのは菅野美穂です。この真之に少し慕情を抱いていたような描き方で小説もテレビもあつかっておりました。

展示場では、兄さんの好古物語が新聞の挿絵とともに説明してあります。

「まだお知りんか、大阪に師範学校というものが出来たぞ、なもし。これはあんた、無料（ただ）の学校ぞな」（司馬遼太郎『坂の上の雲』（一）、文藝春秋、二〇〇九年、十八頁）と言う近所の人の話を聞いていた好古は大阪に行くのですね。そして、行くときに小学校の教員になると言うのです。そしたら給料がもらえる。「七円もらえる。やがて返すけんな」（二十三ページ）と、お父さんに言って伝馬船に乗る。そして大阪に向かうのです。ここを読みますとちょっとぐっとくるところがあるんですね。「やがて返すけんな」。私は、個人的にですけども、親に借りたり、いただいたりしたお金は返さなあかんと思います。受験料なども返さなあかんと思います。しかし、私の場合は、していないので苦い思い出になりますけどね。そういうところに司馬さんの人間通のやさしさがうかがえます。

方言で私というのは「あし」ですね。「あしは会うたことはないが」、これは好古の兄さんが帰郷した際に、ずっと年下の真之に言ってる内容ですが、「今の世間では福沢諭吉という人が一番偉い」。福沢は後に慶応義塾を作りますけれども、好古はいろんな著書をあげて真之に伝えるんですね。「好古兄さんは軍人だから軍人の名を挙げると思った」と書いてあります。兄さんの好古は陸軍の大将になりますが、退

役した後は勲章をもらわず、松山の市立の無名の北予中学という中学の校長をされて生涯を終えました。お墓に行ってきました。質素でありますけれど、堂々とした石碑でした。そういう人物でした。

そして真之のモットーとした言葉「熟慮断行」が、直筆で残されています。大学の試験も山をかけるのが、非情にうまかったといいます。バルチック艦隊との戦闘にそなえて作戦を練った形跡も残されています。

関連するミュージアムが東京の田端にあります。「田端文士村記念館」といいます。田端文士村記念館というのは、谷崎潤一郎のライバル芥川龍之介がここに引っ越して住んでいたんですね。それからいろんな小説家とか、芸術家が田端に押し寄せてくるんです。この背景には東京美術学校がこの近くにできたことがあります。陶芸家、彫塑家、鋳金家、画家、版画家、小説家、詩人などが田端に集まり、文士村・芸術家村を形成してゆきました。竹久夢二もいました。陶芸家である板谷波山は一番有名ですね。小杉放菴は洋画、水墨画、南画を描いた多彩な芸術家です。

館長さんと、黒崎学芸員のお二人に相談すると、すぐ大龍寺に案内されました。知らなかったのですが、ここに坂の上の雲ミュージアムの中心人物になる正岡子規の墓があるのです。

「連合艦隊が横浜沖で凱旋の観艦式をおこなったのは、十月二十三日である。その翌々日の朝、真之は暗いうちに家を出た。／途中、根岸の芋坂（いもざか）とよばれているあたりの茶店でひとやすみした」（『坂の上の雲』第八巻「雨の坂」、文春文庫、三〇〇頁）。「真之はそのあと三キロの道を歩き、田端の大竜寺まで行って」

とあります。一目散に子規の墓に来たんですね（写真5）。もちろん本人はいないんですけど、墓参りして心を整理しようとしたんですね。「墓地は本堂のむかって左横にある。子規の墓はその奥にあった。／『子規居士之墓』とみかげ石にきざまれた石碑があり、そのあたりの楓がみごとに色づいていた」（三〇二頁）。「そのあたりの楓がみごとに色づいていた」というのは司馬さんの感性でしょうね。そして、この墓誌を読むんです。これは生前、もう長くはないということを悟った子規が自身の紹介をしたものです。

「正岡常規又ノ名ハ処之助又ノ名ハ升又ノ名ハ子規又ノ名ハ獺祭書屋主人又ノ名ハ竹ノ里人伊予松山ニ生レ東京根岸ニ住ス父隼太松山藩御馬廻加番タリ卒ス母大原氏ニ養ハル日本新聞社員タリ明治三十□年□月□日歿ス享年三十□月給四十円」（三〇三頁）。簡潔に自分の写生文学の精神を以って表現した文章になっています。

次は司馬さんの文才がうかがえる名文です。「石碑が濡れはじめ、」雨が降ってきたんですね。「真之は墓前を去った。／雨になった。庫裡で古笠と古蓑を借り、供養料を置いて路上へ出た。／道は、飛鳥山、川越へ通ずる旧街道である。雨のなかで緑がはるかに煙り、真之はふと三笠の艦橋からのぞんだあの日の日本海の海原をおもいだした」（三〇四頁）。

（写真5）
子規居士之墓

ところで、この明治という時代の歴史を、絵画で語り伝えるために建設された記念館があります。明治神宮の聖徳記念絵画館（東京都新宿区霞ヶ丘町）です。

これは、明治天皇と昭憲皇太后が亡くなられてからお二方の御事績を長く後世に伝えることを目的として建設されたのですね。所蔵の絵画作品は、四十人の気鋭の洋画家と四十人の日本画家に依頼して描かれたものです。

日露戦争、明治三十八（一九〇五）年五月二十七日の日本海海戦の油絵（『日露役日本海海戦』）は海軍省が奉納した、洋画家・中村不折（ふせつ）の作品です。描かれた人物は豆粒のようですが、双眼鏡を持った東郷平八郎も見られます。真之が考案した乙字戦法とか丁字戦法とかで対峙しているところでしょうか。また、観艦式も描かれています。海軍省が奉納した『凱旋観艦式』です。真ん中が明治天皇です。後には皇太子殿下、大正天皇が描かれています。海軍の大臣山本権兵衛。東郷平八郎を推薦した人物ですね。

また、結城素明（ゆうきそめい）の『江戸開城談判』も所蔵されています。明け渡しの会談ですね。西郷隆盛、勝海舟など幕末から明治にかけての政治家が描かれています。結城は、ヨーロッパを回って来まして、日本画は「粉本」と申しますか、本で見て描くというスタイル、つまり写実、実写に基づかなかったから衰退してきたことに気づく。ヨーロッパではデッサンに力を入れて油絵を指導します。結城は日本画家だけれど、デッサンに力を入れて指導しようと考えていたのです。東山魁夷が東京美術学校を受験するときの面接官が結城でした。東山魁夷は、もともと洋画家になりたかったのですが、お父さんが日本画家であれば許すというので、やむなく日本画を志望したのですが、才能というのは分かりません。代表的な日本画

家として成功していますから。

余談ですが、私の論文（「聖徳記念絵画館についての一考察」『大手前大学社会文化学部論集』六号、二〇〇五年）に聖徳記念絵画館の壁画の図版を掲載する際に、無料で写真を借用できて嬉しかったことと、昭和天皇にそっくりな人が出てこられて驚いたことなど、思い出されます。

ところで、皆さんが今おられるこの大手前アートセンター（写真6）も、近代日本の発展に貢献した人物と縁があるのです。森具交差点から北方向に歩くと、左手にある建物の南壁面にアートセンターの文字を見ることができます。その手前に和風の門があるんです（写真7）。不思議な感じがしますが、もともとここは、岩本栄之助の邸宅跡地だと伝えられていて、これは岩本邸の名残なのです。

岩本栄之助のお父さんは和歌山県の出身ですが、江戸の末期に大阪へ出てきて、蝋商を経て屋号銭栄という両替商を営んだ。『公会堂の恩人岩本栄之助』（大阪市民生局、一九五四年）によりますと、間口六間、番頭さんが三、四人いたんですね。お父さん、可愛がったんです。夭折した兄の代わりに、良く出来た二男に家督を継がせるということになりま

（写真6）
大手前アートセンター

（写真7）
岩本邸所縁の冠木門

す。

株式仲買人となった岩本栄之助は、明治四十二（一九〇九）年に渋沢栄一を団長とする実業視察団の一員として土居通夫らと渡米しました。この渋沢栄一は、先ほどお話ししました聖徳記念絵画館建設時に八〇枚の壁画を当時の優秀な画家たちを選び描いてもらって、その画題にゆかりの深い方が絵画を篤志奉納するかたちで完成させる、そういう方式を考えた中心人物だったのです。

栄之助は、アメリカを視察するなかで、公共的な事業への寄附を名士の条件とした習慣に共感をした。大原美術館もそうですけど、成功した実業家が富を社会に還元する。助け合いの精神ですね。それに触発された栄之助は大阪の中之島に公会堂をつくろうと考えたのです（写真8）。公会堂を建設する資金として百万円を寄附する。様々な金持ちの人が大阪に大勢いますから、彼は差し出がましいと思うところもあり、渋沢に相談するんです。渋沢は、それは考える必要はないといい、むしろ応援をした。建築はどんなデザインにするかというのはコンペ形式にした。東京駅を作った辰野金吾に審査を委ねるんですね。そして岡田信一郎の設計案が最優秀となります。今、岩本栄之助は大阪に中央公会堂の恩人として知られています。大阪を訪れる人は中之島にこんな立派な建物があると知ってびっくりされます。

栄之助は明治四〇年の大暴落の時には株仲間を助けたということで

（写真8）
大阪市中央公会堂

「義侠の相場師」という異名をとった人物ですが、いいことばかりではない。第一次世界大戦後の異常景気の折に、相場で資金を失い、辞世の句を残し自殺を図ったのです。

その秋をまたでちりゆく紅葉哉

この中央公会堂の貴賓室と言われている三階の特別室の天井には、松岡壽（ひさし）の油絵『天地開闢（てんちかいびゃく）』（伊邪那岐・伊邪那海の二神の図）が見られます。そして地下には「岩本記念室」が設置されています。また立派な展示室内に岩本栄之助縁の品なども含めて、公会堂の歴史を見ることができます。

このアートセンターも、公会堂と同じように、一般市民の皆さんに公開できる教育文化施設としての使命を持って建設されたのです。そこで、この大手前アートセンターで開催した展覧会の中から私の関わったものをいくつかご紹介します。

これは、平成九（一九九七）年に開催した「黒田アキ展」のチラシです（写真9）。この黒田アキさんの父親は、洋画家黒田重太郎の従兄です。大手前学園の福井家とは非常にご縁があり、前理事長の福井有先生がスポンサーとして力を入れておられました。フランス在住の有名な芸術家です。展覧会テーマは

（写真9）
黒田アキ展チラシ

コスモガーデンプロジェクト。その都度こういう主題を考えて展覧会をする現代作家です。この公開講座の会場にも作品が展示されました。インスタレーションといって、空間全体を作品に仕上げたものです。この部屋で大きな巨大な箱を組み立てて、黒田さんがここで作品を制作していったのですが、準備をしている写真が残っています（写真10）。腕組みをしている、一番右の方が黒田アキさんです。中央の方が、前理事長の福井有先生ですね。一番左に本公開講座のスタッフの方も写っていますね。アートセンターの担当も兼務されています。黒田アキが芸術創作をする根源には、ミノタウロスのような強い力が作家の内面から出てくる。猛々しいと言いますか、リビドーという生命のエネルギー、そういうものがあるといいます。

このインスタレーションでは、展覧会のオープニングレセプションのご来場者三五〇人に、黒田は感謝を捧げるという意味で、その大きな作品の周囲の床に白いコーヒーカップと白いソーサーをセットにして並べました。その作品の並べ方、展示は、黒田さんも一緒になって、というより彼が展示順の作品の色とか形とかを、周囲に指示したのです。非常にエスニックですね。また、この教室はスクリーンを上げますと、池があるのですが、黒田は白いソーサーを、その池にかわらけ飛ばしのように飛ばした。蓮のように私には見えました。

このチラシに描かれているのは、ヴィーナスです。白いヴィーナス。その形を見ると、黒田のヴィー

（写真10）
展覧会準備中の様子（マウント）

ナスだとフランスやアメリカの人々はすぐに分かるのです。黒田のヴィーナスは、ピカソの裸婦のように有名なフォルムを形成しているのです。

次に紹介する一九九六年に開催した「黒澤明展」も福井前理事長が企画しました（写真11）。この時はまだ黒澤さんはご存命中でした。あとで伺った話ですが、京都の病院に入院中でした。チラシの絵は、絵コンテですね。黒澤は、映像にする前にイメージを絵コンテに描いていますが、『影武者』の絵コンテでは、勝新太郎似に描かれていたものが、のちに黒澤とぶつかったために、映像になったときは、仲代達矢に代わっていた、ということもありました。

映画衣装の展示のうち十二単も展示され、専門家が来て飾りつけしました。この部屋では『七人の侍』の資料、そして臨場感いっぱいで映画を上映しておりました。『七人の侍』は非常に内容もすごいですし、気迫に溢れていて、日本人の魂を揺さぶる作品ですね。

ところで、先ほど名前が出ていた勝新太郎といえば、戦後の「悪名シリーズ」が有名ですね。悪名というのは、悪事をしてその事で世間に名を知られた悪者ということです。悪く言われているけれども本当は清い生活をしている。今東光の小説ですね。この今東光と川端康成は文学を通しての友人でもあるん

（写真11）
黒澤明展チラシ

です。やくざの親分が戦後、大阪の繁華街で町の人に悪さをする。それを警察にかわって悪人をこらしめ活躍をする主人公の話ですね。こういう話も大阪文化の一要素を形成していると考えられます。

一方、この夙川の辺りの文化の一要素には、どういうものがあるかと言いますと、例えてみると、非常に紳士然としてますけど、小津安二郎の作品のイメージですね。

小津安二郎の描く岩下志麻の『秋刀魚の味』とか、池部良・岸恵子の『早春』。あるいは原節子『晩春』や、笠智衆・原節子の『東京物語』です。作品に描かれる場所は変っていきますけども、内容の基調となる話、ストーリーは、理想的な生活を送る中でも、そこにはまた、人間として当然悲喜こもごも、生活苦など、社会的な、リアルな面も出てくる。非常にスマートでそして、知的で、しかも、大人のやさしい心が映画のストーリーの琴線に触れる、そういうふうな名作を撮っています。こういう小津が描く映画の世界に通じるものが、夙川文化を形成する要素の一つを支えていると私は思うんです。

さて、話が夙川に戻ってきたところで、谷崎潤一郎についてお話しをしたいと思います。

芦屋市の谷崎潤一郎記念館（写真12）、行かれた方も多いかと思いますが、この記念館を建てる際に模した建物が京都の「石村亭（せきそんてい）」です。谷崎はそこで生活していたんですね。その頃は「潺湲亭（せんかんてい）」と名付けられて

（写真12）
芦屋市谷崎潤一郎記念館

いました。この数寄屋風建物には池泉回遊式の庭があって、このあたりのデザインが芦屋の記念館にいかされています。建物は下鴨神社の近くにあって、谷崎はそこに住んで小説を書いていたんですね。熱海に移住することになったとき、日新電機株式会社社長の奥様が谷崎夫人の松子さんと高等学校の同期だったということから、そこで保存されることになったのです。「石村亭」の名前は、日新電機株式会社の所有になってから名付けられました。建物は当時のまま保存されていて、「潺湲亭」と書かれた額も現存しています。

谷崎の『高血圧症の思い出』にも、「私はこの邸を『潺湲亭』と名づけ、当時日本に滞在していた銭痩鉄氏に揮毫して貰った扁額を掲げ」た（『夢の浮橋』中公文庫、中央公論新社、二〇〇七年、一六二頁）とあります。ここでは『潤一郎新訳源氏物語』を完成しております。そして、小説『少将滋幹の母』がここで生れました。また、『夢の浮橋』の舞台となって、「五位の庵」として描かれています。

「『五位の庵』と云うのは、この家の庭によく五位鷺が飛んで来るので、祖父の時代からこの邸を『五位庵』と呼び習わしていたから」で、その「五位庵の場所は、糺の森を西から東へ横切ったところにある。下鴨神社の社殿を左に見て、森の中の小径を少し行くと、小川にかけた幅の狭い石の橋があって、それを渡れば五位庵の門の前に出る。」（十一頁）。「そこはやゝ御殿風に造られていて、東から南へ縁が廻らしてあり、欄干は勾欄風になっていた。南側はわざと日の光りを避け、棚を池の面の方へさしかけてあって、野木瓜の葉が一ぱいに繁ってい、池の水がその葉の下を潜りつゝ勾欄の際まで寄せていた。欄にもたれて眺めると、池の向うの木深いところから滝が落ち、春は八重山吹、秋は秋海棠の下を通って、暫

くの間せゝらぎとなって池に落ちる。」（十五頁）「橋を渡ると四阿があり、四阿の西に茶席があった。『ばあ、あんたは附いて来たらいかん、そこに待っとい』と、私は乳母を待たせておいて、一人で茶席に這入るのを楽しみにした。屋根が低く、部屋が狭く、まるで子供のために造られた玩具の建物のような気がするのが嬉しくて、私はそこに臥そべってみたり、瓦燈口や躙り口を出たり這入ったりしてみたり、水屋の水を捻ってみたり、そこらに置いてある木箱の真田紐を解いて中の器物を取り出してみたり、大きな露地傘を被ってみたりしていつ迄でも遊んでいた。」（十八頁）。以上の様な谷崎が描写したそのものを見てみるということが文学を知ることにもなります。表現のしかたを詳しく知ることになるんです。『夢の浮橋』には、きれいなお継母さんが、乳が張っていてそれを搾乳している、そういうような描写もあります（五十三頁）。

ただ、谷崎はリュウマチで悩んでおりましたから、寒いところは苦手で、岡本のほうに行ったりして最終的には熱海に行ったんですね。「滝があり池があるので、冬は寒く、湿気が多いところから、冬を越すことはめったになかったが、この庭の雪景色の素晴らしさも知らないではなかった。」（『高血圧症の思い出』、一六二～一六三頁）

建物には、新春の母屋を飾る掛け軸も残されています。絵は樋口富麻呂画伯です。その絵には、佐藤春夫作の「春琴抄之歌」を谷崎自身が金泥で添え書きしています[1]。佐藤春夫は「秋刀魚の歌」で有名ですね。

をかに来て　ほからかに啼くや　鶯　ありし日の
谷間の雪に　ましへたる　氷るなみたは　知る人そ知る

雪が好きですね、谷崎は。

ところで、谷崎の文学は今、調べつくされていますね。では、何が研究されているのか。近頃は挿絵を誰が描いたのかということを専門家がよく調べてるんですね。その中で、中川修造という人が出てくるのですが、それは誰なのか、どの様な人なのか。『ドリス』の挿絵をしています。『苦楽』に一九二七年一月から四月に連載した『ドリス』の仕事は、谷崎が四十一歳の時で、中川修造二十八歳でした[2]。

私が美術館に勤務していた時、展覧会（国立国際美術館「近代の水墨画・中国と日本」展）のために水墨画を中川先生宅にお借りしに伺ったことがあるんです。家は京都の白梅町からちょっと行ったところで、自分で建築をされ瀟洒な和風建築でした。中川先生は非常に温厚な人で、奥さんは大阪の鼈甲（べっこう）問屋の「こいさん」で、先生が高等学校の先生、新進のデザイナーとして竹中工務店に顔が利く建築家。大阪難波高島屋で有名なショーウインドーのディスプレーをやってた人ですね。近くの松坂屋は大変だったと私は思っています。それ以外に谷崎と交際があった。子供さんはおられなくて、奥さんが戦後、谷崎と会ったら、「あんたも大人になったな」と顔を見て言われたそうです。

昭和五十五年、京都で上品な和菓子を創作し大成功をとげられた方のご希望で、美術館を創る協力を

させていただいた事がありました。その方が個人美術館を創るのを中川先生に相談されたんですね。そして美術館に勤務していた私はこのことで中川先生からご相談を受けたのです。中川先生が考えている美術館が実現出来るかどうか、私の先輩がおりましたので、和泉市久保惣記念美術館（和泉市内田町）に相談のため一緒に行ったんです（写真13）。その後、美術館の建設・運営事業に先輩が協力するということで、進んでいきました。

宝塚の清荒神清澄寺という大きなお寺があります（写真14）。そこの建物「聖光殿鉄斎美術館」[3]の設計者は、この中川修造先生です。蓬莱庫・収蔵庫も作ったのです。その当時の貴重な館の資料に設計者名が書かれてありますし、柏木知子さんという鉄斎美術館主任学芸員が、その箇所のコピーを私にくださいました。清荒神の鉄斎美術館建設にまつわる資料が出てきましたので、少しその話をしたいと思います。

（写真13）
中川氏と筆者

（写真14）
清荒神清澄寺

鉄斎美術館の開館にあたって、坂本光聰というその当時法主の方が「中川脩造氏設計のもと」とあいさつ文にも書かれてあります。

展示室・収蔵庫の温度湿度の施設は、東京国立文化財研究所の保存科学部長であった登石健三の意見を参考に設置されました。この方はレオナルド・ダ・ヴィンチの「モナ・リザ」をフランス政府から借りて東京国立博物館で展覧会をするときに、カビを生やして返したら日本の名折れだと言って、「調湿」と言いますけども、自分で薬で調節したんですね。その為、会期が終ってパリに返すまでカビが発生しなかったという、素晴しい実績を持っておられます。

鉄斎美術館の正面の額「聖光殿」と門標「鉄斎美術館」の文字は森田子龍という書道家・墨象作家の方が書いたものです。森田子龍は抽象画家とも交流があって、阪神間でも活躍した作家たちに大きな影響を与えました。これは、ちょっとお伝えしたかったことです。

清荒神の鉄斎美術館の奥に細いですけど滝が流れているんですね（龍王滝）。その辺りにお不動様がおられます。これを拝みに、みんな来られるんですね。中山寺も別の観音様がおられますが清荒神は不動明王です。修行を助けてくれる。そういうものは簡単には見えないんですね。そして、美術館から下って行きますと清澄寺本堂があります。谷崎の文学・挿絵・装丁を調べて中川修造に至りましたが、建築・デザイナーの方

（写真15）
赤楽山荘の笹部氏
（白鹿記念酒造博物館展示より）

面から調べると、いままで知らなかった事が出てくるようです。

次に紹介するのは笹部新太郎という、この方も夙川に非常に縁のある文化人だといえます（写真15）。

桜がなくなっていく、死んでいく。でも桜に関しては、大学の先生は分類したり、整理したりするのが大事ですね。ところが桜が傷んで死にかかっているのを治すということができない。笹部新太郎はそれができるんです。天皇の心臓執刀医みたいですね。その笹部新太郎の有名な物語ですけれど、実際の資料をもとにお話をしてみましょう。

笹部は岡本に引っ越して来るんですね。そこを訪ねてみました。この岡本南公園は、桜の研究家笹部新太郎の邸宅跡を笹部新太郎の奥様が亡くなられてから神戸市が買収して、市民の憩いの場に整備したと、岡本南公園の碑に書かれています。（写真16・17）

以前甲陽園にあった料亭「はり半」で水上勉が笹部にインタビューしている写真も残っています。水上勉は笹部をモデルに『櫻守』（新潮社、昭和五十一年）と『花守の記』（毎日新聞社、昭和五十二年）と二つ、小

（写真17）
岡本公園案内板

（写真16）
岡本公園（笹部新太郎邸宅跡）

説とエッセーにしています。

『花守の記』には、巨大な桜の物語が二つ載っております。一つは岐阜と富山県境の庄川の幽境御母衣（みほろ）流域にダムを造る、東洋一のダムを造る。この時のことが書かれたんですね。高度経済成長で電気がいるんでしょう。今は原発ですが。この時、一帯が水没してダムの底になってしまう村の墓地を覆うようにして大きな二本の桜があった。霊木とされていたのです。代々ここから戦争に行く人は、ここへ生きて帰ってくる、あるいは死んで魂が帰ってくる、そういう伝説のある巨大な桜です。四〇〇年以上生きている銘木です。この大工事の総指揮を電源開発の総裁、高碕達之助が担当していました。そして笹部氏に助けを求めに来たんです。なぜ高碕が岡本の笹部のところに来たのか。自分は自然を破壊して、自然の生き物を殺してきた。しかし今回は、四〇〇年以上もこの村の風物を守り、村人と共に生きてきた二本の巨桜を助けたいと思ったからだったのです。当時の常識では、大学の先生で植物を研究している人は、生きた桜の木を死んでから分析することはできるけれども、生きている間に治すことはできない、と言われていた。それなのにダムの近くに桜を移し替えるというのは常識外でした。高碕は、自分の立場を全部笹部さんに任せるからぜひやってくれと依頼する。これが成功するんです。その桜のわきに自然石の碑がある。高碕の歌が彫んであります。

ふるさとは　水底（みなそこ）なりつ　うつし来し　この老桜　咲けとこしへに

もう一つは、これは岐阜に住む医者の話ですけども、美濃の西の谷、根尾谷に一五〇〇年近く生きて

いる「淡墨桜」――薄墨桜と書くのと、淡墨桜と書くのとどっちも「うすずみざくら」と言いますが――その幹が折れて、瀕死の状態になった。「ヒガンザクラ」の若い木の根を持ってきて、巨桜の根に若木の根を継いだ。そうすると、翌年から花を咲かせたんですね。結果的に古い千五百年の桜が蘇生した。その蘇生した桜の一部、これが先ほどお話した清荒神の鉄斎美術館の入り口に立っております（写真18）。この桜は、千五百年の根尾谷の桜を枝分けしてここで咲いているんです。桜の命を大切に守った人たちの努力の結果をここで見ることが出来るのです。

桜は毎年、大体同じ時期に咲きますね。人間は桜を見て感動しますけども、生きていると少しずつ老いていきます。そういうふうに、その辺りのせつなさ、自然の力、自然の妙、そういうことを谷崎は『細雪』で言いたかったんではないだろうかと思います。「年を取るにつれて、昔の人の花を待ち、花を惜しむ心が、決してたゞの言葉の上の『風流がり』ではないことが、わが身に沁みて分るやうになつた。」（『細雪』上巻、中央公論社、昭和二十三年、二二一頁参考）。

（写真18）
鉄斎美術館

先日東京に行ってきましたが、有名な三社祭の浅草寺で許可をもらって撮影していたんですけど、浅

草寺本堂外陣正面に「施無畏」の額がありました。「畏れ無きを施す」と書いてあるんですね。これは観音様のことですけども、畏れ無き現象を施す。「無畏」、どこかで読んだなと思ったんです。先ほどの清荒神・聖澄寺にある慈雲尊者の揮毫による扁額です。「無畏城」。「畏れ無き城」と読みます。つまり、畏れがないということは、畏れをもたない、真理を抱く、正しく知って不安や疑惑をはなれている、だから、不安や疑惑がないから畏れから解放されているという意味ですね。

それからまた、小島英熙著『山岡鉄舟』（日本経済新聞社、二〇〇三年）の六〇頁の「剣禅一如に苦心」のところに「施無畏」が説明されています。勝海舟、高橋泥舟、山岡鉄舟、幕末の三舟の一人として有名な山岡鉄舟のことを書いた本です。彼は剣道の達人であっただけでなく、人間的にもよく出来た武士であった。明治になってから、山岡鉄舟は西郷隆盛の推挙で明治天皇の侍従職になるんですね。しかし社会の荒波に負けないように明治天皇に厳しく躾をするんですね。そういう男でした。質実剛健であり、かつ人間味あふれる男であったと思いますね。

初めから誰も強くはないんです。二十八歳の時に江戸の剣道場で、浅利又七郎義明という剣豪がいたんです。俊敏に動き強いんです。どうしても勝てないんです。山岡はそれは心の弱さの表われだと、坐禅するんですね。そして時が流れ、十七年後、四十五歳の時に「無畏」を感得し、「施無畏」と同体になり、無想剣の極致を得た。山岡は、先ほどの慈雲尊者を尊敬していたといいます。

人は文化を作りますが、文化もまた人を作っていく。心の有り様は文化の根源に作用します。この「畏

れ無きものとする」と前にも言いましたが、恐怖の「恐」ではないのです。「畏れ」というのは、畏(かしこ)むという「畏れ」ですけれども、こだわりのないようなまでの修業をしなさいということでしょう。そういうふうなことを最後に私がこの場でお伝えするというのは、私より年長の方がおられますのでちょっと畏むことなのですが、私が好きな言葉です。「畏れ無きを施す」、そういう人生を送りたいなと思っております。

---

1 資料提供：日新電機株式会社、写真撮影：若林龍一、解説文：日新電機株式会社広報グループ

2 明里千章執筆「谷崎は小出楢重をいつ意識したか」(小出龍太郎編著・明里千章著・荒川朋子著『小出楢重と谷崎潤一郎～小説「蓼喰ふ虫」の真相～』(春風社、二〇〇六年、一二九～一四八ページ)の中の「中川修造」(一四〇～一四八ページ)に詳細に論考されているのを参考にした。また細江光執筆「謎の『画家』・中川修造氏のために」の論考(たつみ都志・永井敦子編集『谷崎潤一郎と画家たち～作品を彩る挿絵と装丁～』芦屋市谷崎潤一郎記念館、平成二十年三月二十日発行、一二～一三ページ)を参考引用した。また、明里千章「中川修造と谷崎潤一郎、その後」の論考(同書一四～一五ページ)も参考とした。

3 聖光殿「鉄斎美術館」は清荒神清澄寺第三十七世光浄和上の理想とその遺志を継承して、半世紀以上にわたって蒐集されてきた画聖富岡鉄斎(一八三六～一九二四)の作品を広く公開展示するため、第三十八世光聰和上が昭和五十年四月、ここ清荒神清澄寺の境内に開館いたしました。

(同美術館パンフレットより)